

検証、そして発信

野坂 武 秀

はじめに

今回もわずか四本のレポートではあるが、そこにはいくつもの検証と発信が見えてくる。分科会の存在意義を見いだせるよう、その要点をまとめてみたい。

一 選択科目の現状の中で

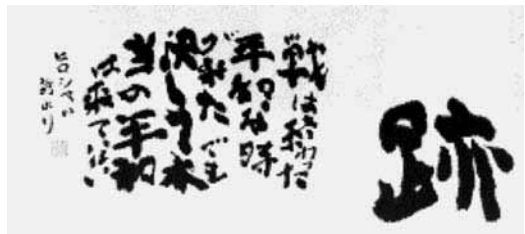
最近、テレビなどでは書道の新たなブームが巻き起こりつつある。「書道パフォーマンス」「書道ガールズ」などという言葉が生まれ、女子高中生書道部員たちがカラフルな衣装に身を包みながら音楽に合わせて大筆をふるい、数メートル四方の紙の上でパフォーマンスとともに大作を仕上げ、いく姿がテレビから流れてくる。また、漫画の連載、単行本から火が付き、書道部の活動をテーマにしたドラマも

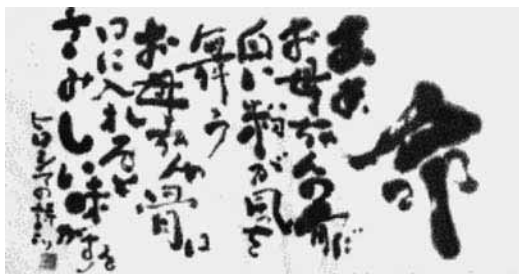
放映されている。

しかし、書教育の現実には、授業の行われる教室の中にあり、テレビの中の華やかさとはほど遠い。

私の勤務する高校は都市周辺の中規模校で、美術は講師に依存しながらも芸術三科目がそろい、一・二年で四単位必修プラス三年の選択科目が加わり、音美書三科目ともⅠからⅢまでそろそろ今時貴重な学校で、多くの学校では芸術必修はⅠのみ二単位、都市部の大規模校と総合学科以外では、音美書がそろっている例は稀有である。

旭川東高・伊丸岡レポートは、芸術Ⅰが一単位ずつ一・二年に分割され、書道と国語兼任の多忙な毎日の中で、書道が高校教育の中で果たす役割を再検証。もう一人、芦別高・中谷レポートでは、一年生音楽必修で二年からの選択の中に書道が組み入れられた変則的なカリキュラムの中での取り組みを報告していて、芸術科目の実態がうかがわれる。それに加えて、高校生の実態がさらに現実を難しくしている。民主党政権になり、高校授業料の無償化も見えてき





なくない。

伊丸岡レポートの言葉を借りれば、何を教えるべきか、「教材・単元」の構築・検討は、各学校の現状と相まって、議論はつきない。それらのいずれの課題についても、特効薬もなければ正解もない。ないからこそ、こうした自主的・主体的研究会が継続されるのであり、悩みながら、揺れながらの実践を記録していくことが大切なのである。

中谷レポートの中に、このような現状の中で生まれてき

てはいるが、授業料免除家庭の増加は著しいものがあり、私も久しぶりの一年生担任をしているが、毎月のように督促状を受け取る生徒が何人かいる。格差社会の底辺であえぐ子どもたちには、進路の希望も見えてこない。進路の希望が見えない子どもは、授業への意欲も希薄になる。だからといって、進学校の生徒が意欲に満ちているかという、必ずしもそうではない。自分の進路に必要か否か、極端な価値観に左右される生徒も少

た言葉として、次のように書かれている。

今後、生徒には、「本物をじっくり見る」「感じたまま描く」「普段から言葉には敏感になり、一つずつ言葉を獲得する」これらに気をつけて制作するよう、効果的な指導法を工夫していきたい。

どのような現実があれば、未来の主権者として成長していく権利がある子どもたちに、このような気持ちで臨むことが大切であろう。

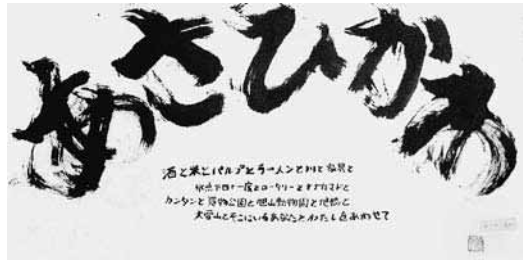
二 全国とつながりながら

小規模ながらも分科会を地道に続けてこられた原動力の中に、全国教研との密接なつながりがある。全国教研に「書教育分科会」が誕生したのは、全教が独立して最初に開かれた九〇年の京都での教研からで、北海道からはほぼ毎年レポートを送り、途中、私・野坂が五年間、伊丸岡氏が五年間司会者を務め、今は私が共同研究者を引き受けている。これは、全道合研の中に数ある分科会でも貴重な存在だ。おかげで、分科会での討議内容にも深まりが出て、実践の幅も広がっている。

「平和」を考える教材、「自我像」と題した自己を見つめる教材、「地域」を見つめる教材などは、全国で学んでき

たものを土台として、それぞれが独自の味付けをしながら深めてきたものだ。学校が変わり、生徒の実態が変わっても、未来の主権者になる子どもたちに培ってほしいものという観点から生まれた教材だ。

昨夏、東京で開催された全国教育教育の集いでは、作家・あさのあつきさんが、「バッテリー」など少年を主人公とした小説を書き続ける理由として、子どもは大人になるための過程として生きていくのではなく、その年齢にふさわしい主人公として精一杯に生きているのだから、その時々が一番美しい姿を描いてあげたいという内容のことを話していた。その話を聞いた直後に行われた書教育分科会では、まさに書教育で目指しているところと一致するということでも盛り上がりを見せた。その精神は、全国の書教育分科会も北海道の分科会も同じである。伊丸岡レポート・中谷レポートともに、その熱い思いは共通している。



三 新たな発信をめざして

書教育分科会の課題の中に、義務教育からの参加を集めたいということがある。小中学校では国語の中に「書写」があり、教科として独立していないために全国教研でも義務制参加者は少ない。しかし、その関連と教科の発展、そして何よりも子どもたちの可能性と発達を広げる教育の目的から考えれば、書写担当の教員がこの分科会に参加してくることの意義は大きい。

そこで、その可能性を探るために、全道全国の共同研究者という立場から、私を取り組みを始めた実践を少し紹介したい。

① 夏・冬休みの小学生向け開放講座

一昨年、音更高校に赴任して町教委と密接な関わりができたことから、夏休みと冬休みに小学生向けの開放講座を実施することにした。夏休みは「ジャンボ書道講座」、冬休みは「書き初め講座」である。ともに、町教委との共催で、町教委でチラシを各小学校に配布し、受付も担当してくれる。

夏の「ジャンボ書道」は、書写とは違うが、子どもたち



に書道の楽しさを知ってもらうことを目的に、冬の「書き初め」は、最近書道塾へ通う子どもが減り、伝統文化としての書き初めの機会がなくなっている小学生に体験してもらうことを目的にしている。

今年で夏冬二回ずつ実施したが、ともに盛況で手応えを感じている。今年の書き初めは、NHK地域ニュースでも取り上げられ、テレビで全道に流れた。

学校開放講座のあり方については、教員の勤務超過問題ともつながり賛否もあるところと思われるが、芸術教科としての書道がある高校では、施設・設備の充実が地域では抜きん出ているため、その活用は重要だ。大きな筆、大きな下敷き、これを高校の一部の生徒の活用だけで終わらせるのはもったいないし、ましてやそれが地域の子どもたちのために生かされるのは、意義が大きい。

② 小中学校教員向け書写講座

前述の小学生向け講座と併せて、夏冬休みに、教員向け

講座も開始した。小中学校教員の免許制度や養成課程の問題から、多くの教員が困難を抱えている状況は今までも聞いていたのだが、今まではその接点を作ることが難しかった。しかし、音更町に来て、町教委との接点ができただから、この講座もすんなりと実施にこぎ着けた。

二年目の今年度は、一年目の実績がきっかけで、十勝管内の教育研修センター講座でも講師を引き受けることになった。その中で見えてきたのは、音楽などは、独立した教科であるために、最低限ピアノのバイエルが義務づけられたりしているのに対し、書写の実技に関しては、単位を受講すればよい程度にしかないということ、意味を持たないということ、大学の教員採用の実態が、学者や書作家に限られているために、大学の書道教員自体に、書写指導の経験がないために指導できていないということだ。

そこで、私の中でも、新たな書写指導のためのカリキュラム研究の必要が出て



きた。また、二年目なので、導入程度しかできていないのだが、今後の課題は見えてきた。

③ 小学校での出前授業

これも前述の教員向け講座がきっかけで、私自身が小学校へ出向いての授業実践が始まった。最初は、一年目に講座を受講した先生からの依頼で、下音更小学校四年生での授業。そして、前述の研修センター講座の一コマとして幕別小学校四年生での授業。さらには、今年の冬休み明けに、四年生の授業がきっかけで、下音更小学校三年生の書き初め授業とそれぞれ二クラスずつで授業をした。

中でも、研修センター講座では、多様な取り組みを見せるために、同じ四年生だが二クラスで違う単元の授業をして見せた。

一つは、下音更小学校で実践済みの授業で、「左右」の文字を、似ているが筆順や形が違うことを、象形文字の成



り立ちから説明し、部分練習から全体練習に持つて行く授業。指導書や教科書メーカーによっては、象形文字から筆順・形が違ってくる解説もしてあるのだが、なかなか書道経験のない先生方にとっては、うまく組み立てられない単元である。

もう一つは、小学校三年の毛筆書写の最初に出ている「螺旋」と「ジグザグ」の練習を生かして、四年生の教科書では「はず」という文字で出てくる「むすび」の練習を「くるま」という文字に置き換えての授業。これは、全くのオリジナルなのだが、「はず」という言葉自体が、北海道の小学四年生には理解しがたいものであることを指摘し、地域や子どもの実態に合わせた教材の工夫と、「螺旋」「ジグザグ」の練習の生かし方を示すために考えたものだ。

小学校の一時は四五分なので、「螺旋」と「ジグザグ」の練習を取り入れると、「くるま」と実際に書くのはたった二枚の半紙だけになってしまったのだが、子どもたちは「る」「ま」の「むすび」（丸めるところ）もスムーズに筆を運ぶことができて、とてもうまく書くことができた。

ともに、参加していた約三十名の先生方やクラス担任も、そのできばえには驚いていた。

もちろん、私自身は小学校の教員経験はないし、初めての学校・クラスで、初めての単元を授業することは勇気が

教員よりは実技を義務づけられてはいる。しかし、持ち時間の関係で教科外の担当がいたり、行書が入ることで難しくなったり、受験のための時数確保で書写が削られたり、抱える問題は多いという。今後の課題としたい。

四 おわりに

今教研では、書教育は分科会以外の場面にも、発信の場を与えてもらった。美術・理科とともに、昼休みのロビーでパフォーマンスを実施。ジャンボ書道講座の実践を生かし、私のパフォーマンスの後で、会場の来客にもジャンボ



必要だ。しかし、小学校での書写の実態と今後の展望を考えると、自分の学校での実践と同時に、これらの取り組みを進めていくことの大切さも実感する。

これらの実践を受け、次は中学校でも授業をしてほしいという要望が出てきている。

中学校教員は、国語の専門免許を取得する課程で、小学校

書道を体験してもらった。道具の準備等、大変なことも多かったが、書教育分科会からの発信ということでは、貴重な場を提供してもらった。

ちなみに私がパフォーマンスで書いた文字は「望」、記念講演で北海道教育大学の福井先生がお話しされたテーマ『学校は生きる希望』にあわせて選んだ。この『北海道の教育』の報告と併せて、書教育分科会への理解を深めてもらい、参加者の増加への起爆剤となることを願っている。

(音更高校)

